

《公開講演会記録》

危機にあるテレビ報道

TBS「報道特集」アンカー 金平茂紀



私は1953年生まれです。ちょうどその年に日本でテレビ放送が開始されて60周年になります。ですので、私も今年還暦を迎えます。テレビの歴史と共に産声を上げて、テレビによって自分の価値観を形成して、テレビによって正義感を養って、街頭テレビの力道山が反則をしないことをもって正義だと思ってきました。世の中の移り変わりとか、価値観の形成というのは、テレビの歴史と重なっているところがあり、テレビの悪口を言われると自分の悪口を言われるような気持ちがありました。テレビの報道に仕事を求め、幸いだったかどうか分かりませんが、報道しか知らない人間です。

テレビの報道というのは、60年たってみて、現在はどうも危機的な状況だと思います。もっともこれまでも「テレビは

危機だ」というのは、「近頃の若い者はだめだ」と同じようにずっと言われ続けてきました。しかし、今、テレビ総体はかなり危ない時期にきているということは、自分なりの経験、モスクワ、ニューヨーク、ワシントンの3カ所で海外生活をした経験から日本のテレビのありようを見ると、非常によくはない状態が続いている、という思いがあります。

テレビへの問い

最初に問いを立ててみました。まず「テレビは伝えるべきことを伝えているのだろうか」、それから「テレビは伝えるべきことをちゃんと伝えてきたか」、これは過去のことですね。過去にできていなかったのだとしたら、今もできてな

くてもテレビってそんなものだとなってしまうのですが、そしてそもそも「テレビは伝えるべきことを伝える役割を期待されているのか」、これは未来に対する問いかけです。

このことを自問してみなさんと一緒に考えてみたいのですが、私は、テレビは伝えるべきことを伝える能力はあると思っています、潜在的な能力も含めて。それを阻んでいるものはいったい何なのか。また、過去にできていたのか。実際きちんとテレビが伝えてきた時代はありました。今、テレビ放送開始60周年で、NHKが昔の良かった番組を流しています、BSなどで。「シルクロード」とか、「新日本紀行」とか。みな優れています。今のテレビと比べると品格があって、とても



東日本大震災

ちゃんとしています。日本語もきちんとしているし、ある種の品格があるのです。それと今のテレビを比べるとどうなったんだろうと思っています。

最後に一番大事なところなのですが、そもそもテレビはメディアの役割を終えたつあるのではないかという問題です。これは考えてみるととても深刻な話です。テレビが登場して映画産業が衰退し

たとか、ラジオの全盛時代にテレビが登場して、ラジオがメディアの役割として3番手、4番手になったとか、という変遷がありました。テレビも、それに代わるものによってもう必要なくなったのでは？という疑問があります。

なぜかという、私は大学で「メディア論」などの講義をたまにするのですが、メディア論はいまだにある種ブームです。メディアは訳が分からないものの、影響力が大きいですから、「メディアとは何か」は学生にとって興味があるのでしょう。しかし、学生に聞くと、テレビを見ていないというのが、今の学生のオシャレです。「テレビなんか持ってねえよ」と、「うちはテレビ見ません」という学生たちが、お勉強のできる大学に行けばいくほど増えています。

テレビと同じように育ってきた人間としては非常にショックを受けています。テレビがカッコ悪いものの代表になってしまっているのであれば、もうそれはテレビがメディアとしての役割を終えているのではないかと思わざるをえません。ここまで言ったことを最近のニュースに即して考えてみたいと思います。

まず「東日本大震災報道」。当時はあんなに一生懸命放送をして、CMも流さ

ず、その分、公共広告機構の修身の教科書みたいな画面が流れていた時期もあったじゃないか、それなのに今は何だ！という声が聞えます。あれだけのことがあったにも関わらず、テレビはまったく昔のまま、何もなかったように、同じことを繰り返しているではないか、と。

「福島第1原発事故報道」については、テレビは最初「安全だ、安全だ」とか、「ただちに人体に影響はありません」とか、嘘ばっかりついていたじゃないか。君たちは御用学者ばかり画面に出して「安全だ」と言わせ、水素爆発が起きて、今度は「大変だ、大変だ」となっても、避難区域の指定については同心円しか示さなかった。実際に放射能でひどく汚染された地域の情報を流さないで、大本営発表のように、東京電力と政府の情報をそのまま垂れ流していただけじゃないかという批判を、常に受けてきました。

さらに原発に反対する市民のデモに対しては、何を一体びびっているのだ。ちゃんと伝えようとしていないではないか。首相官邸前にあれだけの人が道路を埋め尽くしているのに、何を配慮しているのか、全然報道してこなかったじゃないか。そういう声が私たちのもとにもどんどん届いていました。

それから大阪での「橋下徹氏の登場と、それにまつわる『大阪維新の会』をめぐる報道」です。彼はもともとテレビから出てきた人です。「行列のできる法律相談所」という番組でデビューして、どんどん人気を博して、大阪府知事選挙に当選して、次は知事を投げ出して市長になって、今度は国政の「日本維新の会」という政党の共同代表になっている人間です。この人が掲げている政策がなぜ大阪を中心に支持されているのか、テレビとの関係はどうなのか、彼が言っていることの中身の検証はどうなのか。

実は今、テレビはびびっていて、彼についてなかなか伝えようとしません。特に在阪のメディアは、彼が言ったことを非常に批判にくい空気ができあがっています。なぜこうなっているのか。東京のほうでも、この大阪の動きについて、きちんと検証しようという報道はほぼ姿を消してしまいました。

さらに中東の激動ですね。「アラブの春」といわれ、エジプトとか、リビアとか、チュニジアとか、あの地域で起きた政権転覆と民衆の動きが、あれだけたくさん伝えられましたが、動きのその後は、たとえばエジプトは今大変な状態になっているにもかかわらず、まったく姿を消

してしまって、アルジェリアで起きた邦人に関係するものだけを報道しています。企業戦士の遺体が帰ってきた時にはそれを悼む報道一色に染まってしまいました。あのアルジェリアで起きたことの本质は一体なんだったのかを検証する報道はほとんどない。

昨年来の領土の問題もあります。これについてもある時期まではやりましたが、その後ぱたと終わってしまいました。昨年の9月、私がいる番組では、かなり力を入れて尖閣諸島の問題をやったつもりですが、今は、領空侵犯、レーダー照射、すぐきな臭い問題での検証がメインになってきて、領有権の本質的な問題についての検証は姿を消しています。

「沖縄をめぐる問題」は、実は私のライフワークです。沖縄の米軍基地の問題というのは、この30年、40年、ほとんど変わらない構図が続いているのですが、今はほとんど沖縄の報道を東京で見ることとはなくなりました。在沖縄のメディア、「沖縄タイムス」とか「琉球新報」と「本土」の多くの新聞を読み比べると、まるで外国の新聞と日本の新聞のようです。あまりの落差に驚きます。しかし、テレビはもっとひどいです。テレビは今どこも沖縄の問題は取り上げていません。



オスプレイ

たとえばオスプレイ配備をめぐる動きは、沖縄にとっても、また日本の安全保障上でも非常に重要な問題ですが、それを検証するような報道は姿を潜めてしまいました。

こう並べてみると、先ほどの問いに対する答えは残念ながら明らかです。

何が起きているのか

こうした状況を踏まえて、今現在、何がテレビの世界で起きているのかを考え

たいと思います。

1つは、東日本大震災や福島第1原発の事故ではっきりしているように、「忘れやすい」ということです。忘れるんですよ。忘れるのは人間の知恵とも言えますが、我々はメディアです。メディアというのは自嘲的に言うと、人の不幸で飯を食っているような人間たちです。だからあれだけの最大級の不幸とか災害があった時には、そんなに簡単には忘れるべきではないのです。ところが忘れるんです。その忘却の速度の速さにはうんざりします。自分だけは違うなどと言うつもりはありませんが、それにしても、あれだけのことを忘れる速度が速過ぎると思います。

次は「慣性の法則」です、慣れです。もっと言えば惰性です。あれだけのことがあったにも関わらず、忘却をしてどこに行き着くかというと、これまで通りとか、今まで通りのやり方でいいんだよ、という方向にいつてしまうのが、私はとても残念です。

福島の事故とか、東日本大震災では、まだ16万人もの人が家を失って、仮設住宅住まいで、自分の家に帰れないという状況の時に、忘れてしまっただけで「今まで通りにやっていけばいいんだ」みたいな世

界に戻っていくのはいけないという思いがあります。

3つ目は「刺激第1」です。テレビは特に目先の出来事に飛びつく現在性とか速報性に特徴があるのは確かで、刺激の大きいものに飛びつきます。昨日(2月7日)は、中国海軍によるレーダー照射が、一番刺激の絶対値が強かったとすれば、その前は、柔道女子選手団への体罰の内部告発問題が刺激の絶対値の一番大きいものでした。

○感性の相乗的劣化

スーパー表示のド派手化

BGMの過剰使用

内輪の会話・内輪の笑い

沈黙の価値の無視



その時その時のトピカルなものに飛びつくのは、テレビの慣性としてしょうがないにしても、ずっと持続してやらなければいけないテーマもあるのです。特に東日本大震災とか福島第1原発事故はそういう種類のものだと思っています。

加えて思考、考え方が「上書きモード」になっているのも問題です。上書きモードというのは過去のものが全部消えてしまふことです。今を報じることで、過去を消していつている。とても危険なことだと思います。

もう一つ指摘しておきたいことは、「感性の相乗的劣化」です。つまり鈍くなっているのです。想像力が縮んでしまったり、あるいは深みがなくなっています。みなさん昔のテレビと比べてください。今起きていることは、たとえばスーパー、いわゆる字幕ですが、あれがド派手化しています。ぴかぴか光ったり、色がついたり、いろいろな字体があるのですが、漫画文字みたいになっています。あるいはBGM、トークショーなどのバックにちゃかちゃかと音楽が流れています。神経的に流れています。今、シーンとしたトーク番組はないです。何かが必ず流れています。「沈黙の価値の無視」、無音であることが怖いみたいです。

それからこれはスタジオで起きていることですが、出演者同士の会話とか笑いや怒りとかで、放送内容が完結してしまっています。これは、私はテレビの退廃だと思っています。テレビが持っている本来の視聴者とのコミュニケーションを閉ざしています。メディアの基本的なありようにかかわることです。

それから古い問題ですが、コマースリズムが今や民放だけでなくNHKも含



むテレビの業界をどんどん浸食しています。つまり視聴率という指標が高くなって儲けがあることが、番組の評価そのものという風潮が、今さらながらテレビをあまねく覆っています。

毎日朝、起きると、番組担当者には折れ線グラフみたいな表が配られます。分刻みの視聴率の変化です。ビデオリサーチという電通系の会社が毎日出しているのですが、午前9時にオンラインで一斉に配信されます。それを見て、皆、一喜一憂します。折れ線グラフから、ここは誰々が出て下がった、だからその人は出すべきじゃないとか、くだらない論議がいっぱい出てきます。分刻みです。それが今、NHKも含めてテレビの現場を蝕んでいるという現実があります。

新しい動き

メディア企業の系列のあり方に変化が起きています。系列は昔からあり、ご存知のように日本の民間放送は、ほとんどが新聞社によって系列化されています。ですが、大新聞も景気が悪くなって、力関係が昔とずいぶん違います。たとえば、朝日新聞とテレビ朝日との関係は、昔は宗主国と植民地みたいな関係でした。歴

代社長は朝日新聞社から送り込まれ、系列ローカル局の社長も全部、朝日新聞を定年になった人で、朝日新聞王国をつくりあげていた時代がありました。今は違います。今、そんなことをやったら大変なことになります。もちろんテレビ局が自前の経営者を育てたということもありますが、テレビのことが分からない新聞社からいきなり来て、明日から社長でございまして、務まる時代ではもうなくなりました。

しかし、テレビ局と新聞社の関係は実は深まったのです。上下関係ということでは、何年か前から様相は変わってきました。そこで経営が厳しくなった新聞社はテレビとか映像媒体を取り込んで、自分たちの生き残りを図っています。これは、読売新聞とか、朝日新聞の動向を見ているととてもよく分かります。メディア企業がどんどん系列化していています。系列化の様相が前にも増して強くなっているのが間違いない事実だと思います。

次に既存のメディアとインターネットメディアとの関係ですが、一昨年、昨年とかなりバトルがありました。「ニコニコ動画」とか、「ユーストリーム」(US TREAM)など、市民が自分たちで配信できるような仕組みがパソコン、インター

ネットで簡単にできるようになりました。そしてそれが何十万回というアクセス数を記録することもあります。ということは、BSやCSのテレビより視聴者の数が大きいということです。

そうすると既存のメディアはもういないんだという誤解が生じます。非常に浅はかな見方だと思います。

インターネットメディアと既存のメディアは、視聴者や市民に対して発信するという意味では同じですが、今までの既存メディアのような制度化された出し方とは違うものをインターネットメディアがどんどん出して、お互いが刺激し合うような関係になれば、インターネットメディアと既存メディアはとてもいい関係になると思います。

日本以外ではそういう関係がどんどんできています。たとえば、アメリカのジャーナリズムの中でも、調査報道の分野でインターネットメディアの人たちが活躍しています。

今、アメリカではピューリッツァー賞をインデペンデントというか、企業メディアではない人たちがとって、既存のメディアがそれをキャリーする役割、伝える役割を果たしています。

そういうインターネットメディアと既存

メディアが相互補完的な関係になることがあらまほしい関係だなと私は思っています。逆にお互いが排他的な関係になって、既存メディアなんか「マスゴミ」だ、あんなやつらは役割が終わったんだみたいな形でとって代わろうとするのは、とても不幸です。現状は、いわばインターネットメディアと既存メディアの同志討ちみたいな、お互いの力を弱め合うような、ののしり合うような関係になっています。とても不幸なことだと思っています。

ネットメディアに関して言えば、今の安倍政権はとても親和的です。ネットが大好きです。安倍総理もFacebookに毎日発信しています。今の政権与党は、たぶん次の参議院選挙で、インターネットを解禁すると思います。選挙運動でインターネットを使うことはもちろんOKとなり、ネットを動員して、自分たちの主張をどんどん不特定多数に投げ出すようなことをやるでしょう。既存のメディア、古いルールにしばられたような出し方をすり抜けるような形で、ニコニコ動画とかUSTREAMとかネットメディアをフル活用して自分たちの言い分を伝えることになるでしょう。

そうした時にネットメディアに対する評価というのも、世の中の見方というの

もどんどん変化するように思えます。いいようになるのか、悪いようになるのかはここで申し上げられません。

もう1つ視聴者の側で起きているのがクレーマー化、「文句屋」化です。番組が終わると、視聴者から番組に対して、電話がいっぱいかかってきます。「何だ今の放送は！」と、文句をつける人がたくさんいて、中には建設的な意見もあるのですが、たいていの場合文句です。お酒を飲んでる人など話始めると2時間くらいになってしまいう時もあります。視聴者がテレビに直接文句を言う、フラストレーションの水位が低くなりました。ものすごい数の人たちが何かがあると、ワッと押し寄せるみたいなことがあって、それがネットのツールが発達したことによって、力、実体的な力に組織され、ある種政治的な圧力になったりすることがあります。

最近起きたことを言いますと、フジテレビが韓流のドラマをたくさん放送していたことに対して、韓国嫌いの人たちが、「韓流ドラマはやめろ、おれたちは日本人なんだ」と連日デモをかけて、それをその人たちが映像を自分たちで撮って、それを「You Tube (ユーチューブ)」とかに投稿しているうちに、その動きが

○視聴者のクレーマー化

ネット右翼のテレビ局攻撃 「韓流」攻撃と紅白歌合戦



どんどん広がって、ついにフジテレビは韓流ドラマをやめてしまいました。

同じような動きが、NHKでもあり、どんどんプレッシャーをかけました。すると、何が起こったかというところ、「紅白歌合戦」に今までは、東方神起とか韓流スターが必ず出ていたのですが、昨年の紅白から外国人はゼロになりました。国粹化しました(笑)。NHKは絶対そんなことは言いませんが、クレーマー化した

視聴者の抗議が効いたのだと思います。

時代の空気の切断点

もう1つ、「時代の空気の切断点」に触れたいと思います。私は3・11は、日本の戦後史の切断点だと思います。「切断点」の意味は、それ以前とそれ以降では後戻りできないような、構造的な変化が起きた地点ということです。

たとえば8・15とか、沖縄の5・15や6・23です。5・15は1972年5月15日、つまり沖縄返還以前と返還後では仕組みが変わってしまう、構造が変わってしまう、そういう切断点です。

8・15もそうだと思います。それまでの軍国日本から、民主日本に変わる転換点として8・15がある。日常的な時間は連続していますが、仕組みが変わってしまった後戻りができなくなる。そういう切断があったと思うのですが、3・11も日本にとってはその1つだと思います。アメリカにとっては9・11がそうです。

同時多発テロ事件があった前と後では、アメリカの外交政策が根本的に変わりました。それ以前と以降では、たとえば社会のありようが、ある種の寛容さを認めていた社会から、まったく非寛容な社会

に転換した切断点だったように思います。テレビというのは、そういう時代の空気を一番敏感に反映する装置、メディアです。そこで何が起きたか、今、一番私たちの業界で話題になっていることを紹介します。

テレビ朝日が躍進しました。売上げとか視聴率とか。放送されている中身ではテレビ朝の人たちがいうところの「硬派路線」、硬いものを愚直にきちんと出しているという路線です。夕方のニュースや「報道ステーション」、この番組を硬派と見るかどうかは、意見が分かれるところだとは思いますが、それにしても、他局の報道番組と比べて決して軟派ではありません。それが支持されてきています。

もう一つNHKの民放化ということがあります。さっき言いましたように、NHKはもう気取りをかなぐり捨てています。昔は官尊民卑みたいな感じでしたが、今は違います。NHKのほうが、こちらが顔から火が出るくらい恥ずかしいかなぐり捨て方をしています。どんどんタレントのリポーターを使ったり、外注によってエンターテインメントの大きな仕掛けをつくったり、そういうことは以前は考えられなかったのですが、それがどんどん進んでいっています。これからもNHK

Kの民放化は進むと思います。

それと反比例するような形で、フジテレビの軽チャー路線が凋落しました。軽薄はテレビだ、楽しくなければテレビではないという、フジテレビが持っていた軽さ、そういうものが、時代の空気の切断点を過ぎたところで、「こんなことがあったのに、いつまでバカやってんだよ、チャラチャラするなよ」といった、ある種の切迫感というか、時代の空気の変化によって、フジテレビは今ものすごい勢いで凋落しています。視聴率だけでいうと、トップだったのが今3位になりました。4位だったテレ朝が1位です。

こんなことが今起きています。私はおもしろい現象だと思っています。あの切断点を境に、ガラリと変わったというのではありませんが、じわじわと効いてきたのでしょうか。

生き残るには

テレビが生き残るには、時代の空気を如実に反映しながら、生き伸びていくメディアでなければなりません。それができる潜在能力はあると思うのです。あとはそこにいる経営者です。経営者にそういうものを見通す力とか、編成能力みた

いなものがないと、逆にものすごい勢いで衰退していくのだろうなあと思います。

TBSもひどい状況ですが、自分がいる会社のことを他人事みたいに話すのは潔しとしませんのでやめておきます。

1つ映像を見ていただきたいと思います。尖閣諸島の問題の10分ほどの放送ですが、テレビの中では少数派でした。つまり「尖閣諸島は日本固有の領土で、領有権問題はない」という官民挙げての大合唱のなかでは、この程度のもので今テレビ界ではなかなか出せないのです。

日本政府の見解は、尖閣諸島に「領土問題は存在しない」、「棚上げ合意はない」ですが、これは実はおかしい話で、TBSの放送記録を調べたら、「JNNニュースコープ」という番組で、当の田中総理が帰国してからどこかのゴルフ場で、囲み取材を受けて、「実は棚上げだった」と記者団にしゃべっているのです。それをニュースにしていました。他のテレビや新聞でもニュースや記事にしていたと思います。「棚上げ合意はない」「領土問題は存在しない」という政府や外務省の見解に対して、自分たちが以前に放送した、書いたことを調べもしないで、それに従うのはどうしてか。検証してみるのが、当たり前の義務です。

持続的に問題に取り組むエネルギーが、一番テレビに欠けていると言いましたが、新聞も同じです。

そこで当時の外務省の当事者に直接会って、「棚上げで合意しなかったとは言えない」という発言を引き出したのが、この番組です。当時書いたのですから、その検証に向かわないのは、自分たちがやっていることに対する責任を取らないことだと思います。しかし、テレビの全体状況でいうと、そういうことをやるのが非常にしんどい局面になっています。それが今、私がフラストレーションを抱えている一番の理由になっています。

(2月8日・公開フォーラム)

講師略歴(かねひら しげのり)

1953年 北海道生まれ
1977年 東京大学文学部卒業
東京放送(TBS)入社
モスクワ、ニューヨーク各支局長
アメリカ総局長をへて報道局長
2010年『報道特集』アンカー
著書『テレビニュースは終わらない』
『テレビはなぜおかしくなったか』など多数